

鐵利の住地に就いて

小川 裕 人

隋唐時代の靺鞨諸部族の研究は、この部族と渤海の政治的支配との關係を明らかにし、延いては渤海の國家組織や社會組織を考究する上に於いても必要な問題であるが、何分にも靺鞨族自身の記録なく資料不備なるがため、

鐵利の住地に關する從來の研究の主なるものは、次の四説である。

(イ) 圖們江の北、興凱湖の南説

丁 若 鏞 大韓疆域考、卷五

(ロ) 黒龍・烏蘇里兩江合流地方説

松井 等氏 滿洲歴史地理、卷二、四五頁

烏山喜一氏 渤海史考、二九四頁以下

(ハ) 阿什河流域説

池内宏博士 滿鮮地理歴史研究報告、第三卷、(四三一—五三)頁

(ニ) 牡丹江流域説

津田左右吉博士 同右(二八二—二八五)頁

ある。余も亦諸先輩の後に附していささかその住地に就いて考へて見たいのである。先覺の叱正を得れば幸甚である。

(イ)の説に於いて、圖們江の北、興凱湖の南と言へば、大體今の綏芬河流域地方に當るが、この地方には渤海時

代に率賓府の置かれた地であること、松井等氏の研究によつて（滿洲歴史地理、第一卷、四一八頁、第二卷、四四頁）全く疑がないから、これを鐵利府の故地に擬定することは困難であらう。

（ロ）の説の弱點は池内博士が既に指摘された（滿鮮、三、六頁）如くで多言を要しない。唐書東夷傳によると、唐に朝貢した鐵利部の住地は、黑水靺鞨より西方になければならぬこと疑ひなく、且つ黑水靺鞨は東流松花江下流域にも住んで居たこと後述の如く正しいとすれば、これよりも東方なる烏蘇里江下流地方に鐵利部を置かんとするこの説は、その根據を失ふこととなる。

次に（ハ）の池内博士の阿什河流域説と、（ニ）の津田博士の牡丹江流域説は、同時に發表されたもので、共に未だ検討されて居ないものである。

池内博士の説に就いて考へると、博士は先づ黑水靺鞨の住地を今の依蘭以東の地とされ、依蘭の地にはその中心部落があつたらうと推定され、それより西方に在つたに相違ない鐵利部の住地に就いては、その候補地として

依蘭より西方に於いて重要な地點なる阿什河流域を舉げられた。

而してこの地方の他の諸要地に、それぞれ唐史によつてこの地方に居たらうと推定される他の諸部族を當て、懷德附近には越喜靺鞨、農安地方には虞婁靺鞨、大榆樹附近には拂涅靺鞨等を當てて、この地方に於いて唯一殘された要地なる阿什河地方が、鐵利部の住地として最も適當であると主張されるのである。即ち池内博士は「鐵利が黑水府の所在地たりきと覺しき今の三姓（依蘭）を限界とし、其の西方に於ける或る地方に住せし部族なりしは殆ど疑を容れざるなり」と論斷され（滿鮮、三、四六頁）、又「鐵利の住地を三姓以西に局限し此の方面に之を覓むるとすれば、先づ其の公補地として阿勒楚喀（阿什河）の流域を閑却する能はず」と言はれた。

池内博士のこの説を成立せしめるためには、先づ今の依蘭地方が黑水靺鞨の住地であつたことが確でなければならぬ。若しこのことが確でなく、黑水靺鞨が依蘭よりも更に東方にあつたとすれば、黑水靺鞨より西方に居た

鐵利部は依蘭地方に居たとしてもよいことになるからである。然るに黒水靺鞨に關する史料をよく調べて見ると、依蘭地方に黒水靺鞨が居たと見られる十分な證據はないのである。

黒水靺鞨は黒龍江流域に居たのみならず、東流松花江下流地方にも住して居たこと疑ひないが、依蘭地方にも居たかどうかは大いに疑の存するところである。次にこれに就いて一言しよう。

(二)

先づ松井等氏は、黒水部は黒水即ち今の黒龍江の下流域に住んで居たとされた(滿洲地理歴史研究報告第一卷四三〇頁)。

然るに箭内博士は、「唐代の所謂黒水は、嚴密に今の黒龍江を指せるにあらずして、松花江の下流をも其名の下に稱せしものと推測せられるのみならず、黒水府の位置は當時に於いては、恐らく今の依蘭より甚だ隔絶せる處にはあらざりしなるべきが故に、金末に於ける開元城(今

の依蘭)と、唐代に於ける黒水府とは、或は略同一地なりしかとも想像せらる」と言はれた(滿洲歴史地理研究報告第二卷、三七七頁)。

この説はその後學界一般の認められるところとなつたものの如く、池内博士(滿鮮、三、二六一四三頁)も、津田博士(同上、二八四頁)も、等しくこれに依據して鐵利の住地を考定された。

然しこの説は黒水といふ名稱を、黒龍江のみに限定し、黒水部が黒龍江下流域に居たといふ從來の説に對し、東流松花江の下流をも隋唐時代には黒水と謂はれ、この地方にも黒水靺鞨が住して居たとする點に於いては、後掲の舊唐書室韋傳の記事より見ても妥當な主張と認め得るが、然し黒水府を今の依蘭に置くことには積極的な證據は全くなく、これは尙檢討を要する問題であらう。

又池内博士が、この黒水府依蘭説を支持するため用ひられた兩唐書の室韋傳の記事も、却て黒水府を依蘭より下流に置く資料にはなるが、これを依蘭に擬定する證據にはなし難いものである。即ち舊唐書、卷一九九、下、

室韋傳には、

其部落(入室韋)傍望建河居、其河源出突厥東北界俱輪泊(今の呼倫泊)、屈曲東流與那河(今の嫩江)忽汗河(今の牡丹江)合、又東經南黑水靺鞨之北、北黑水靺鞨之南、東流注于海(唐書室韋傳の記事亦同じ)。

とある。望建河は今の額爾古納河に比定される河であるが、これが東流して那河(今の嫩江)忽汗河(今の牡丹江)と會するとして居るのは、白鳥博士の言はれた如く、唐代の支那人が机の上で黑龍江の上游と嫩江とを結合したものであらうが、然しこの記事によつて東流松花江は牡丹江の河口より以東に於いて、南北黑水靺鞨の間を貫流して居た事實だけは知られるであらう。若し牡丹江河口の依蘭地方が、黑水靺鞨の中心部落であつたとしたら、牡丹江を合してから、又東經南黑水靺鞨之北、北黑水靺鞨之南、東流注于海などといふやうな書き方はしなかつたであらうと思はれる。さればこの室韋傳の記事は、黑水部が寧ろ依蘭よりも下流に在つたことを立證するに役立つものと言へよう。

又賈耽の道里記には、

至渤海王城、城臨忽汗海、其西南三十里有古肅慎城、其北經德理鎮、至南黑水靺鞨千里。

とある。ここに千里とあるのは、寧安地方から依蘭に至る里數(實際は四百清里にも満たず)としては多きに失する。然るに南黑水靺鞨を依蘭より下流の地に置けば、この里數も必ずしも不適當でなくなる。この道里記の記事を解釋するに當り、黑水靺鞨の住地に關聯して考へねばならぬのは、この德理鎮の位置であるが、これに就いても未だ定説を得て居ない状態である。

池内博士は德理鎮を鏡泊湖の東方、渤海の上京(今の東京城)を北に去ること遠からざる地に、これを比定すべきものとされた(滿鮮十一、二二二頁)。然しこの德理鎮は、道里記の文章を虚心に見れば、必ずしも渤海の上京より遠からざる地と解するの必要なく、この地より北方に千里を距る南黑水靺鞨に至る途中の何處かにこれを求むればよいのである。

津田博士は、これを東京城(渤海の上京)より牡丹江に沿ひて下り、依蘭に至るまでの中間に置かんとされた(滿

鮮、三、二八四頁)。然し博士がこれを依蘭に置かれなかつたのは、箭内博士以来の黒水府依蘭説を絶対のものとした結果で、他に大した理由もないやうである。されば南黒水靺鞨が依蘭に居たのではなく、それよりも下流の松花江流域に居たとすれば、津田博士と雖も、徳理鎮を依蘭に置くことに反對はされないであらう。

松井等氏は、鐵利の住地を烏蘇里江の下流地方に置かれたが、道里記の徳理鎮は、黒水靺鞨を烏蘇里江以東の黒龍江流域に置かれた關係から、「今の依蘭と相對して牡丹江の左岸に存せし明代の幹朶里站に比定され、徳理は即ち幹朶里の省略であらう」と見られた(滿洲歴史地理、卷一、四三〇頁)。徳理・幹朶里の音の比定は別として、道里記の徳理鎮を今の依蘭地方に置かんとされた態度には、余も亦服するものである。黒水靺鞨を松井氏の如く烏蘇里江以東に置かずとも、依蘭を黒水部の住地と見ずに、これより遠方の松花江下流域にこれを置けば、道里記に於ける渤海の首都(今の東京城)地方から、北經徳理鎮、至南黒水靺鞨千里なる徳理鎮は、池内博士の如く渤

海の首都の北遠からざる地に求むべきでもなく、津田博士の如く牡丹江の下流域の或る地點に比定する必要もなく、これを依蘭地方に置いても少しも支障ないのである。池内博士の考も、津田博士の考も、黒水靺鞨の中心部落を依蘭とすることを既定のこととされたことに禍されて居る。既述の如く黒水府を依蘭とすることに、何等積極的な論據はなく、兩唐書の室韋傳の黒水靺鞨の位置に關する記事は、依蘭を黒水靺鞨の住地でないと解した方が、却てよく落付くやうに解されるから、徳理鎮を依蘭に置くことに少しも不都合はない。されば道里記の記事に就いて見ても、渤海の首都から北千里に居るといふ南黒水靺鞨を、依蘭よりも遠方に置き、寧安地方から其地に至る中間の最も重要な地點なる依蘭に、徳理鎮を置くことは一層妥當な解釋のやうに考へられる。

(三)

徳理鎮と音の類似したものに、金代には直顯里部辭勒罕の據城なる特鄰城がある(金史太祖紀、收國元年の條、

及び婆盧火傳)。この兩者は音の類似の他に、大體の形勢より見て同一地と推定される。このことは既に津田博士も(滿鮮三、二八四頁)池内博士も(滿鮮十一、二二三頁)等しく認められたところで、殆ど疑なきものの如くである。而して金史婆盧火傳に辭勒罕・轍孛得兄弟、直彌里部人、管寇耶懶路云々、とある記事より見て、直彌里部辭勒罕の據城なる特鄰城(德理鎮)は、耶懶路と近接して居たことを認めねばならぬ。されば德理鎮の位置の考定には、これと關聯して金代の耶懶路の位置をも併せ考へる必要が起る。若し特鄰城(德理鎮)を依蘭に置けば、耶懶路は何處に置くべきであらうか。

耶懶路の位置に就いては、次の三説がある。

(イ) 雅蘭河説。これは耶懶路を今の露領沿海州の雅蘭河流域に擬定せんとするもので、吉林通志(卷一)先づこれを唱へ、我が松井等氏亦この説を採用された(滿洲歴史地理第二卷一八四頁)。

(ロ) 嘴哈里河流域説。今の圖們江の一支流なる嘴哈里河流域を以て、耶懶路に當てんとするもので、津田左右

吉博士の主張されたところである(滿鮮、四、金代北遼考)。

(ハ) 東京城地方説。渤海の古都なる今の東京城地方を以て、これに擬定せんとするもので、池内博士の主張されたところである(滿鮮、十一、二二一—二二六頁)。

(イ)の説は耶懶・雅蘭の音の類似を、その主要な理由とするものである。然し雅は現代音では耶と類似するが、金代の音では兩者が通じたかどうかは疑はしい。耶懶は押懶(金史、七〇、思敬傳)と書するのみならず、移懶とも寫し(金史、三、天會二年二月の條)て居る。耶・押・移の三字に共通の音はiであるから、耶懶は恐らく $\text{y}i$ と音じたものであらう。されば耶懶水は $\text{y}i$ 水、即ち三水といふ意味ではあるまいか。三道河とか、三水とか、三名の付いた水名は、東滿洲地方には多く見受けられるのであるから、耶懶水は必ずしも雅蘭河に比定するを要しない。

又金史(卷七〇)石土門傳には、世祖が景祖の命を以て耶懶に往つた記事が見えて居るばかりでなく、

弟(石土門の弟)阿斯邁尋卒、及喪終大會其族、率官屬往焉、以伐遼之議訪之。

とあり、又完顏希尹神道碑にも同じことを記して、

太祖以祭禮會於移懶河部長神徒門家、因與其兄弟建伐遼之議、特○與明肅皇帝・秦王宗翰皆○行云々

とある。されば耶懶は今の阿城地方を本據とした完顏氏の諸酋が、容易に行き得るやうな、阿城からあまり遠くない地方にこれを求めねばならぬ。因つて沿海州の雅爾河ではあまりに遠きに失すると考へられる。

(ロ)の説は池内博士も既にこれを論難されて居るところである(滿鮮十一、二二一—二二五頁)が、尙駄足を顧みず一言する。池内博士の研究によれば、今の曠哈里河は金初には阿茶檜水と言はれて居たやうであるが、(滿鮮九、一八六—一九〇頁)、この地方は穆宗の阿疎征伐の時の記事で見ると、

穆宗略阿茶檜水、益募軍至阿疎城(金史、六七阿疎傳)

とあつて阿茶檜水(曠哈里河)流域は、穆宗の阿疎征伐の時に至つて始めて略定された如く記されて居る。然るに

鐵利の住地に就いて

耶懶の石土門は、金史(六七)烏春傳を見ると世祖の烏春征伐のことを記して、

世祖自將大軍與歡都合、至阿不塞水、嶺東諸部皆會、石土門亦以所部兵來

とあり、又石土門傳には、

世祖襲位、交好益深、鄰部不悅、遂合兵攻之、(中略)石土門因招諭諸部、使附於世祖、世祖嘉之、後伐烏春高謀罕及鈍恩狄庫德等、皆以所部從戰有功

とあつて、耶懶の石土門はおそくとも世祖の末年以後は完顏氏に歸して居たやうである。されば穆宗の阿疎征伐の時に至つて始めて略定された曠哈里河流域地方は、耶懶路として適當ではない。若しこれが耶懶路とすれば、穆宗が阿茶檜水を略定するに際し、何等かの形式で耶懶路或は石土門の消息に觸れた記事がありそうなるのである。然るにこのこと更になく、却てこの時始めてこの地が略定された如く記されて居るのは、耶懶路を阿茶檜水流域とすることの出来ない理由とするに足るであらう。

(ハ)の説は金史の地理志(卷二四)や、習室傳(卷七〇)に蘇濱耶懶二水相距千里と記して、耶懶水は蘇濱水(今の

綏芬河)から千里の距離に在つたこと、又地理志や完顔忠傳(卷七〇)が記して居る如く、耶懶の地が地味薄瘠であることの二條件を、共に充足する地として東京城地方を選んだものである。然し綏芬河から千里の距離に在つて、且つ地味薄瘠な地は、獨り東京城地方のみには限らないから、池内博士が特に東京城地方を選ばれたことには何等積極的な論據はないやうである。且つ、この地方を地味薄瘠となすことに既に疑問の餘地もあるのである。

又池内博士の研究によれば(滿鮮、十一、二七二、二八五—二八七、二八頁)、金の世祖時代に、今の敦化地方には溫都部の烏春がその本據を有し、その勢力範圍は徳林石の北の姑里甸地方(池内博士によれば今の寧安地方)にも及んで居たやうに推せられ、寧安の北方に於いて牡丹江に流入する今の海浪河流域には、烏林答部が占據して居たこと殆ど疑ひないから、烏林答部と溫都部の兩勢力の間には耶懶の大曾石土門の勢力を介在させることは却て不自然であらうと考へる。當時に於いても東京城地方は、寧安地方と同じ政治的勢力下に在つたものと考へる

方が妥當ではなからうか、余は右の如き見地から耶懶路を東京城地方に置かんとする説には、遺憾ながら服するを得ない。

然らば余は耶懶路を何處に求めんとするかと言へば、海浪河流域なる烏林答部の勢力範圍の北方、牡丹江中流域が適當であらうと考へる。この地は山岳多くして廣大な平野には乏しいが、寧安より依蘭附近に至る凡五六十里(日本里)の間、全く人烟を絶つて居たとは考へられない。されば余は耶懶水はこの地方に於ける牡丹江の一支流であらうと見んとする。

斯く解すれば池内博士がその東京城地方説の論據として擧げられた、その距離が綏芬河から千里であらうといふこと、又その地味が薄瘠であるといふ條件にも等しく適ふであらう。

金史(卷七〇)石土門傳には、耶懶の完顔部は金室の始祖の弟保活里の血統を繼ぐもので、その後、金室とは久しく相通問しなかつたが、景祖の時に至つて石土門の父直离海が遣使して再び宗系を通せんことを請ふたと傳へ

て居る。これは固より單なる同源傳説に過ぎないものであるが、牡丹江中流域に居た耶懶の完顔部は、海浪河流域に居た烏林答部の石顯が没落した後、即ち景祖の末頃（金史、卷六七、石顯傳）から金室とその勢力範圍を接し、既に好を通じて金室の嶺東經略を助勢して居た歴史事實を背景として成立した物語ではなからうか。余は斯く解するが故に、耶懶路を東京城地方に置く説は採らないのである。

耶懶路を牡丹江中流域に比定すれば、依蘭地方に據城を有する直隸里部の辭勤罕が耶懶路を侵したといふ形勢にもよく適合するであらう。されば余は德理鎮（特鄰城）を依蘭附近とし、黒水靺鞨を依蘭よりも下流の松花江流域に置くことは、賈耽の道里記の記載を忠實に解する所以で、同時に室韋傳の記載にも符合する解釋であるのみならず、金初の情勢にも却て妥當する見解であると信ずるのである。

(四)

鐵利の住地に就いて

以上の如く金代の特鄰城（渤海の德理鎮）は、今の依蘭の地に置いてても大勢より見て不都合はないやうである。然るに金初には五國頭城といふ地名がある（松漠紀聞）が、これは松井等氏の研究によると（滿洲歴史地理、第二卷、一八八—一九六）、今の依蘭の地なること全く疑ない。

さればこの事實は依蘭が金初に於いて特鄰城の所在地であつたといふ余の説と一見矛盾するやうに思はれる。然し必ずしもそうではない。余はこの矛盾を次の如く氷解させる。物の一番上を女眞語では得勒、滿洲語では p.° といふ。頭のことを女眞語では兀住、滿洲語では p.° といふが、赫哲語では p.° といひ、Solon 語では p.° といひ、その他の Tunguse 語では p.° とか p.° といふ。德理や特鄰は得勒とか p.° とか p.° と同系統の語の對音ではなからうか。而して德理や特鄰は上とか頭といふ意味の固有語で、五國頭城の頭城は特鄰城（德理鎮）の漢譯名であらうと考へる。因つて特鄰城は五國頭城と同じで、依蘭の地に在つたと見て少しも不都合はないこととなる。

次に德理・特鄰と音の類似的鐵利に就いて考へて見や

う。既述の如く松井等氏は德理鎮を依蘭附近に比定されたが、鐵利府は烏蘇里江下流地方に置かれ、池内博士は德理鎮を東京城の北方遼からざる地に置かれたが、鐵利府はこれを阿什河流域に置かれた。されば松井氏も池内博士も鐵利府と德理鎮と同一地とは考へられなかつたのである。然るに津田博士は德理鎮を牡丹江流域に置かれたこと既述の如くであるが、鐵利府もこれと同一地と見られた(滿鮮三、二二四頁)。余はその位置に就いては津田博士と見解を異にするがこの德理鎮・鐵利府の兩者を同一地と解された見解には賛するものである。以下その理由を述べよう。

前述の如く余は德理鎮、即ち特鄰城を五國頭城と解するから、鐵利府を德理鎮と同一と見れば鐵利部は五國部の一なることを認めねばならぬ。然るに従來の學説は鐵利部を五國部の一としては解して居ないのである。殊に池内博士は鐵利部を五國部の中から除外することを、その鐵利府阿什河流域説の主要な根拠の一とされて居る。

遼史(卷三三)營衛志下に、五國部・剖阿里國・益奴里

國・奧里米國・越里篤里・越里吉國とあり、文獻通考(卷三二七)女眞の部は五國を説明して、女眞外又有五國、曰鐵勒、曰噴訥、曰玩突、曰怕忽、曰咬里沒、皆與女眞接壤と記して居るのを見て、池内博士はこの兩者を比較し、益奴里は噴訥に、越里篤は玩突に、剖阿里は怕忽に、阿里眉は咬里沒に、當てられ(滿鮮三、一一〇—一一二)、遼史に越里吉部があつて鐵勒(鐵利)がなく、通考に鐵勒があつて越里吉がないのを解釋されて、五國部は遼史に於けるものを以て正しいとされ、通考に鐵勒が加入された理由を説明して、「越里吉は重熙六年以來獨立せる一部族として存在せざりしかば、五國に關する知識を宋人に傳へしものは、此の因襲的名稱に對して唯其の數を填さむが爲めに、姑く鐵利を加へしなるべし。さらば契丹の節度使は、越里吉部に居り、而して五國の諸部族を管領したりしなり。然るに斯る任務を有する官司の置かるべき地として、三姓(今の依蘭)の最も適當なるは甚だ見易き所なれば、越里吉は五國部の第一として、即ち五國部の所在地に任せし部族ならざるべからず」と斷言され

て居る(滿鮮三、一一五―一二七)。遼史の越里吉以外の四部族が、通考の鐵勒以外の四部族と同じであるとされたことは、池内博士の比定に誤はないが、右の博士の考説に於いて尙疑問の容るべき餘地のあるのは、(イ)越里吉部は五國の第一として依蘭に住して居たと認むべき程、強勢な部族であつたか否かといふこと、(ロ)宋人の五國部に關する知識は重熙六年越里吉部が一部族として存在を失つた後に成つたものであるか否かといふ二點である。

先づ(イ)に就いて考へよう。池内博士が越里吉を五國部の第一とされることには何等積極的な理由は存在しない。この部落は節度使を置かれた如く見えることから、直ちに越里吉を五國の第一と見て、この部族の住地を依蘭に置くことには尙疑の餘地がある。

遼史聖宗本紀開泰七年三月の條に

命東北越里篤・剖阿里・奥里米・蒲奴里・鐵驪等五部、歲貢貂皮六萬五千、馬三百

と見えて、遼が貂皮や馬の歲貢を命するのに、越里吉を

除外して鐵驪を加へて居り、又與宗本紀重熙六年八月の條に、

北樞密院言、越棘(越里吉)部民、苦其酋帥坤長不法、多流亡、詔罷越棘等五國酋帥、以契丹節度使一員領之

と見えて居る。單にその酋長の不法なるために部民が多く流亡してしまふやうな有様では、越里吉部は五國部の最大部落と見ねばならぬ程強大な部族とは考へられない。却て弱小なる部族だから、歲貢の命令から除外され、單に酋長の不法なりし故に部民が多く流亡してしまつたのであらうと解する方が妥當であらう。

斯く見ると越里吉部を五國部の筆頭とすることは却て不都合のやうに考へられる。

次に(ロ)に就いて考へよう。池内博士は文献通考に於いて、五國と境を接して居たと記されて居る女眞を、阿什河地方の生女眞ならざるべからずと見られ、重熙の初に於ける阿什河地方の女眞は、未だ生女眞として其勢力を認められざりしが如ければ、宋人が五國の名稱を傳聞したる時期は越里吉の酋帥の罷められたる以後であらう、

とされて居るのである(滿鮮三、一六〇—一六一頁註9)。

然るに宋會要の女眞の部を見ると、

天禧元年、遣首領隨高麗使徐訥入貢、首領自言、女眞之外、

又有五國、曰鐵勒、曰貴訥、曰玩突、曰怕忽、曰咬里沒、皆

與女眞接壤

とあつて、通考と全く同じ五國部に關する記事を記し、

且つこの知識を得た時期と由來を明記して居る。この記事によれば宋人が五國部に關する知識を得たのは、天禧

元年で、且つ五國部と境を接して居る女眞の首領自身か

ら聞いたのである。而してこの女眞は宋會要の女眞の部

の記事を詳細に檢すると、池内博士の考へられて居るや

うな阿什河地方の生女眞ではなく、その前身なる三十部

女眞であつた。

天禧元年は遼の開泰六年で、越里吉部が一部族として

の存在を失つたと池内博士の推せられた重熙六年よりは

二十七年以前で、遼史に五國部といふ名が始めて見えて

居る重熙元年(遼史興宗本紀)よりは十六年以前である。

遼史に於いては兀惹や渤海を加へ(聖宗紀、統和二十一年

四月の條)或は鐵驪を加へて(前掲聖宗紀開泰七年三月の條)五部と記された例はあるが、五國部の稱呼の見えて

居るのは興宗紀重熙元年十一月の條が始である。されば

五國部に關する宋人の知識は遼人のそれよりも古きこと

疑なく、且つそれは五國部の隣人なる女真人から直接聞

いたのである。されば五國部に就いての稱呼は、女真人

に創り、これが宋人に傳つて漢譯されたもので、遼人は却

て宋人からその稱呼を傳聞したものと推せられるのであ

る。遼人は宋人から五國の名を聞いたが、その中の鐵利

は五國部の他の部族よりも遙に早くから遼に朝貢し、他

の四部族とは異つて遼と特別の關係に在つたから、遼人

は鐵利を五國部から除外し、他の四部族と同じく統和二

十一年頃から遼に朝貢した同一地方の部族なる越里吉を

鐵利の代りに入れて、その數を満したものと考へられる

のである。

斯く考へ來ると五國部の中に鐵利部を除外して越里吉

部を加へる遼史の記錄よりは、鐵利部を入れた宋人の記

錄の方を正しいとすべきであらう。而して鐵利を五國の

中に加へる以上、その活動振りより見て鐵利が宋人の記録に見える如く五國部の第一に置かるべきは言ふまでもないことである。

以上の考察にして誤ないとすれば、鐵利部は五國部の筆頭で大勢より見てもこれが依蘭の地に在つたと見らるべきは當然であらう。然るに鐵利(鐵勒)は德理(特鄰)と同じく女真語の得勒、赫哲語の *ti*, *Solon* 語の *ti* と音に通ずるから、頭とか上とかいふ意味の女真系統の語の對音であらう。而して依蘭の地を五國頭城と言つたのは五國鐵利城の漢譯名と見られる。されば鐵利府は依蘭の地に在つて德理鎮と同じものであると見ても少しも支障ないのである。

又遼代の宋人の記録には鐵利に音の類似した部落名で鐵句と書したものがあつた。即ち胡嶠の陷北記を見ると、彼が福州(今の彰武の北方)で聞いたこととして、

距契丹國、東至于海、有鐵句、其族野居皮帳、而人剛勇、其地少草木水鹹濁色如血、澄之久而後可飲

と記して居る。この記事より見ても鐵句は鐵利と同じも

のと推して支障ないやうに思はれるが、更に語意の上からも相通するやうに解される。女真語では上城のことを黑徹忒得といふ。黑徹は城といふ意味であるから、忒得は上といふ意味である。鐵句は忒得と音が類似するから、これは上といふ意味の女真語の對音とも見られる。されば鐵句は鐵利と意味に於いても相通するやうである。

又遼金記事(遼史拾遺、卷十一、所載)には

海東靑出於女真東北鐵句等五國、遼主延禧酷愛之、每歲大寒、發使趣女真以海東靑入貢、發甲馬數百取之、五國界巢穴中、往往戰爭而得、國人厭苦

とある。これを宋會要の記事と思ひ合せれば、鐵句は鐵利の同名意譯なること全く疑なく、且つ五國の筆頭の如く記されて居る。されば鐵利が五國の筆頭で依蘭の地に居たことは全く疑ないであらう。

以上の如く考へると池内博士の鐵利考の主なる弱點と見るべきは、兩唐書室韋傳の記事を曲解されて黑水府を依蘭に置かれたことと、宋會要の記事を顧みられず、通考の記事を重熙年間より後に得られた知識に基くものと

解されたことの二點と見られるであらう。

次に津田博士の説を見ると、博士がその鐵利府牡丹江流域説の根據とされて居るのは、

(イ) 渤海の首府から甚しく遠くないこと

(ロ) 名鷹の産地と思はれること

(ハ) 五國部と密邇して居ること

等である。これ等の諸條件は鐵利の住地を依蘭地方としても満されないわけではなく、殊に(ロ)と(ハ)の條件は鐵利を五國部の一として依蘭の地とした方が一層適切に充足されるであらう。

又(イ)の渤海の首府から甚しく遠くないといふ條件も、鐵利人が渤海使節と共に唐や我國等へも屢々入朝した事實を見て言はれたので、その本據地が依蘭であるとしても、牡丹江に沿ひて上れば直ちに渤海の上京に出られるのであるから、必ずしもこの條件と抵觸するものではない。

津田博士がこれ等の條件を擧げられて、鐵利の住地を牡丹江の流域に置かれながら、尙依蘭まで持つて行かれ

なかつたのは、池内博士と同じく、依蘭が黒水靺鞨の住地で黒水府の所在地であるといふ箭内博士以來の考を信奉されて居たからであらう。

(五)

鐵利部は唐の開元年間に至つて始めて史上に現れる名である。池内博士の研究によると(滿鮮三、二七頁)隋代には阿什河流域(安車骨部の住地)の東北方、依蘭以東の地方には黒水靺鞨が在つたやうであるが、その間に鐵利部と稱する特別な部族が居たやうには考へられない。されば鐵利部は黒水靺鞨の一部分を成してゐたもので、鐵利部といふのは黒水靺鞨の頭(上)部といふ意味ではなからうか。依蘭地方はその地理的情勢から文化に接觸し易いために、鐵利部は黒水靺鞨の中の他の諸部に比して早く文化を攝取して、又その野性を失つたことも比較的早かつたのではなからうか。且つ依蘭地方は渤海の勢力も徹底し易いので、依蘭より東方の黒水靺鞨が飽くまで渤海の勢力に反抗したるに反し、鐵利部は早く渤海に従順

となりその勢力の下に文化的希求の充足に轉向して居たのであらう。

依蘭地方の鐵利部に渤海の勢力の及んだことは全く疑ないが、それより以東の黒水靺鞨が渤海に服屬したか否かは明かには知るを得ない。唐會要(卷九六)には及渤海浸強、黒水亦爲其所屬とあり、唐書黒水靺鞨傳には、後渤海盛、靺鞨皆役屬之、不復與王會矣とあるが、唐會要は黒水靺鞨の住地を渤海の顯德府(今の敦化地方)の北と見て居り、唐書は渤海靺鞨以外の靺鞨を盡く黒水靺鞨と見て居るやうであるから、これ等の記録が黒水靺鞨の渤海に服屬した如く記して居ても、これを以て直ちに眞とするには足りない。鐵利部の故地に鐵利府、拂捏部の故地に東平府、越喜部の故地に懷遠府が置かれる等、渤海に服屬した主要な靺鞨部族の故地には盡く渤海の地方官廳が置かれたのに、黒水部に黒水府の置かれたことの史に見えて居ない點より見て、黒水部が渤海に服屬したかどうかは明らかでない。又若し渤海に服屬したとしてもその從屬の程度は非常に微弱であつたであらう。

鐵利の住地に就いて

天寶以後渤海の勢力が一層鐵利部に加はり、渤海の依蘭地方の經營は益々進展して來たので、依蘭以東に居た黒水部は唐との通好の道を斷たれるに至つたものと推される。唐會要等が黒水部の渤海に服屬した如く記して居るのは、その唐に通じなかつた事實を見て記したものではなからうか。さればこの點より見ても黒水靺鞨を依蘭に置くことは妥當ではないであらう。

因て余は鐵利部を依蘭に比定し、黒水靺鞨をそれより下流の松花江流域にも置くことは當時の大勢より見ても適切な見解であらうと考へる。

註

①池内博士は、完顏氏の始祖同源傳説の成立を考定されて、この傳説は本來完顏氏自身のものでなく、實は祖宗實錄の編者完顏昂等が胡十門(曷蘇訥女眞の酋長)の言に由來したる其の三祖の傳説に多少の修飾を加へ且つ三祖の各に其の諱を興へしに過ぎざるべきを」と言はれて居る。博士の説によると、この傳説は金室がその建國後、他より採用したものと見られるのである。然し高麗史(卷一三)を見ると睿宗の第四年六月に、高麗に來た完顏烏雅東の使の奏言として、昔我太師盈歌管言、我祖宗出身大邦、至于子孫義合隣附、今太師烏雅東亦

以大邦爲父母之國と記して居る。これによると完顔氏の始祖傳説は烏雅束(康宗)時代から完顔氏自身のものとして存したことは全く疑なく、池内博士の考説は誤と見るべきである。

②三十部女眞の住地は池内博士の研究(滿鮮八、朝鮮高麗朝に於ける東女眞の海寇)に於いては、咸興地方であるが、余はこの女眞は咸鏡道地方のみならず間島地方にも住んで居た女眞部族の總稱であると解し、阿城地方の生女眞も實は三十部女眞が遼の中期以後に於いて移住したものをその主要分子とするものであると見んとする。然し宋人に五國部のことを傳へたものは三十部中の咸興地方に住して居た部族の一會であることは言ふまでもない。これ等の點に就いては稿を改めて論ずるであらう。

追記

池内博士は最近發行の滿鮮地理歴史研究報告第十五册所載の勿吉考に於いて、再び黑水府の位置に就いて論ぜられて居る(二〇—四二頁)。余は不覺にもこれに接せずして本稿を印刷に附し、遂に博士の近稿に敬意を表するを得なかつたのを遺憾とする。然し博士の結論に於いては勿論、その論據も亦前の鐵利考に於けると大差なきを認めるから、余のこれに對する態度に於いても些の變更なきことを、本稿の初校を終るに際し一言附記するに止める。